

# 第20回地域医療・介護研究会 レポート

日時：2016年6月24日(金) 18:30~20:00 曇  
場所：ちどりビル2F 参加者：41名

今回のテーマは『心のケアの必要な方の在宅療養支援』でした。つくしんぼのケアプラン福岡東の管理者徳永さんから事例を報告して頂き、本事例に関して連携している訪問看護ステーションゆいまーるの北島さん、ケアエイドの前川さんからも補足報告して頂きました。どの様に接すれば患者さんの不安を和らげ、在宅療養をより良く支援できるかなどディスカッションしました。“解決”の難しさを感じた一方で、日頃の悩みなどを交流でき、皆さんから今後に向けて積極的な感想を寄せて頂きました。

## <つくしんぼのケアプラン福岡東 管理者 徳永さん>

70代の男性の事例。30代から精神疾患で療養入院を繰り返していましたが、65才で一度退院するも、救急搬送を繰り返し、再度入院。1年程前に再度退院となり、独り暮らししています。退院時、医師からは「在宅復帰はこれが最後のチャンス。何日がんばれるかわかりません、2~3日かもしれません」と話されました。

身寄りが無く、近い友人もいません。ヘルパーの手が回らない所は劣悪な生活環境となっています。何度も救急要請し、ER医師や救急救命士から「独り暮らしの限界では?」と注意を受けることもありました。

精神系の訪問看護ステーションが入って服薬管理など行っています。不安軽減のためにも、話しを聞いてあげられる人を増やすため、訪問マッサージに週1回入ってもらうようになりましたが、これもなかなか受け入れてもらうまでが大変でした。ショートステイも勧めていますが、利用の当日になってキャンセルするなど、未だに利用に至っていません。

1年前の昼夜問わず電話が頻回にかかってきて、電話に出れないとパニックを起こすこともありました。次第に接し方を掴んできて、発せられる言葉にキーワードが無いが気づけるようになってきました。電話で不穏な様子を感じたら傾聴して本人のできることを聞き出して行動を促す様にしたりして、不安軽減を図っています。最近は電話の回数も減り、救急要請も減ってきました。

初めは2~3日で再入院の可能性もありましたが、在宅で本人にとって圧迫感の無い生活を送りつつ、サービス提供側としては不安を軽減する術を理解して使い分けることで、在宅生活を1年続けることができました。



徳永さん

家に引きこもりがちな人は、ADLも低下していきますので、ADL向上を目標に外出支援、社会資源活用支援などに取り組んでいます。

夜も電話当番者が利用者のお話を聴いています。



訪問看護 Sta. ゆいまーる 北島さん



ケアエイド 前川さん

## <グループディスカッション>

- ・ 例えば夜中だったら「今 時で、自分も寝ているので、 さんも寝ませんか」など時にははっきりと伝えることも大事。
- ・ はっきり言うことも大事だが、言わないといけないことを言い切れない状況が多い。
- ・ 若い頃にしていたことを話題にする、社会的要因を踏まえて接するなどすると良い関係作りができる。
- ・ ドタキャンが一番信頼されていそうな人が付き添うなどすれば効果があるのでは、その際は手弁当になってしまうのが課題。
- ・ 今後は国策として精神科病棟から在宅への退院が増える。学習の場が必要。
- ・ 情報共有を図り、不安に思うであろうことは“はり紙”などで先手を打つ(電話で毎朝その日のスケジュールを確認される その日の予定を前の日に貼り替えておく)

有馬センター長から「今後在宅で心のケアの必要なケースが増えるでしょう、医学というより看護学や介護力の活躍が期待される分野で、挑戦できる分野だと思います」と閉会の挨拶が述べられました。

(次回は7/22「在宅における感染対策」です。リクエスト・質問等お寄せください)